

随想・比較思想

1

古今東西のオリジナルの諸思想家（宗教・哲学はもとより諸科学や文学・芸術なども含む）は、あまたの臆見^{ドクサ}や数々の偏見がいわゆる常識という虚名の許で世俗に広く深く浸透しているなかから生まれ出て、それらを一つ一つ打ち破って、今日に伝わる。

比較思想という名称だけは新しいこの学問についても、世間一般はもとより学界においてさえ、あまりにも多くの誤解や歪曲その他が満ち溢れている。それらを聞き見るたびに、せめて比較思想をまともに扱っている書物の一冊でも読んで欲しいと希わずにはいられないのは、比較思想そのものに携わる人々すべての眩きといえよう。名称だけは新しいと右に記したこの比較思想は、ほんの少し調べてみれば判然とするように、その歴史は古く、さらにまた、きわめて広範囲に遍満している。（それらについては、すでに拙著『比較思想序論』春秋社刊に詳述してあり、いままた繰り返し返すまでもない。それは一八〇ページあまりの小著なので、志ある方は参照して頂きたい。）ここに「随想」として記す2と3との趣意も、この二項に

三 枝 充 蕙

一貫するものを述べる4も、大部分は右の拙著に触れてはあるけれども、敢えてこの機会に、いささか渾たる私見を記す。

2

およそ何ごとをするのにも、比較というはたらきを通過しないことは、決してあり得ない。それはすでに幼児において、また動物においてさえも、充分に肯かれる。どんなつまらぬ（と見える）ことがらにおいても、数ある選択肢のなかから或る一つを選び取るには、たとえ意識されていなくても、必ず比較を行なっている。

たとえば、私たちはたえず「ことば」を使う。そのとき、どのような「ことば」をその場に用いるかは、数多くある「ことば」を比較しつつ、それらのなかから最適と思われる一つだけを選択して取り出し、それを自分の「ことば」として、口に発し、文字に記す。

したがって、ここでは選択肢は多ければ多いほどよい。またそれらから選択するのに、自由であることが望ましい。このような日常茶飯事の「ことば」についてみても、でき得るかぎり多数の「ことば」を吸収し蓄積していることが求められ、そのことから、それらの

「ことば」の内部や背後にある質量ともに豊かな知識を要求するようになる——というあたりから、すでに比較思想はスタートする。

とくに学生諸君に卑近な例を記そう。外国語を学び始めてその最初に出会うのは、そこには未知の単語が並んでいて、その単語ごとに辞典を繰ると、そこでは、一つの外国語に多数且つ多種の訳語が羅列されており、それらのなかから一つだけを選んで、ときにはさらにそれよりもふさわしい同類の母国語をみずから考え出し、その外国語に当てる。これを拡大した翻訳という作業は、明らかに比較思想のジャンルの一つを構成する。

もとより、「ことば」には、それぞれの言語にまつわるニュアンスがあり、それらは微妙に異なる。右の拙著にも記したとおり、たとえば、へそら、空ないし天空、sky、Himmel、ciel」というような、いわば世界共通の自然（現象）を指示する「ことば」ですら、すでに九鬼周造（『いきの構造』）の指摘したように、それを用いる人ごとに、またそれを聞く人ごとに、それぞれに固有の意味と内容がこめられている。すなわち、「ことば」は、それについて考えれば考えるほど、つぎつぎと諸問題が生じてくる。

こうしたなかで、「ことば」そのものへの配慮が充分に透徹しているならば、なんらの選択も経ないまま、思いついただけの「ことば」をついとうっかり口に発するというような軽佻浮薄は、やがて消滅しよう。あるいはまた、つねに決まり文句を反復して語り、記し、さらには、そのひと独自の感性を欠いた無味乾燥な口調や文体系などという哀れな膠着状態からも、いずれは脱却し得よう。

宗教といい、哲学といい、倫理学といい、もしくは文学や史学そ

の他、万般のいわゆる人文系の学問は、ごくわずかの例外を除いて、すべて「ことば」によって構成されている。「ことば」という人間において最も基本的なるもの（ハイデガー流にいえば「道具」）に拠って立つ諸学問は、上述のように、あらゆるケースに応じた「ことば」において、すでに必ず比較を通過しており、その際、どれほどの比較がそこにこめられているかが、大きなキポイントとなる。そしてそれに対する深刻な自覚を徹底しようとするところに、比較思想の独自の機能がある。しかもその重大な機能を充分に把握してはじめて、みずから立ち向かっている学問の対象が、そしてそのなかの特定のテーマが、さらには方法論や問題意識や資料などが、いよいよ鮮明となり、同時にまた、それに取りかかる自己自身のありかたが掘り下げられる。

そうしたなかで、比較思想においては、いたずらに優劣その他を競う価値判断は極力排除され、しかもみずから取りあげる思想（この語に関して前記の拙著にほぼ尽くした）の真の価値を問い、ふり返って、その価値をみずからの生と対決させる。一方に、厳しい冷静があり、他方に、情熱的な集中がある。一方に、対象への没入があり、他方に、自己への沈潜がある。一方に、透明な洞察があり、他方に、複雑な解明がある。

くれぐれも心にとめおくべきことは、比較思想は、ディレクターの思いつきでもなく、ベースなき根なし草でもない。山とつまれた博識の開陳でもなく、いわんや他への自己顯示でもない。そうではなくて、実は、みずからそのことをみずから顧みるという、自己の生きかたそのものに、最も深くかかわる。冒頭の一文に戻って、自

己が臆見や偏見にとらわれていないか、そして常識的・世俗的なものへの迎合に溺れてはいないか、さらに、より重大なことは、自己ひとり良しとする専断に陥ってはいないか、それらの痛切な反省こそが、比較思想の途にはかならない。

3

「中外日報」という新聞がある。今年一月に創立九〇周年を祝ったという由緒ある社史をもち、かつては日刊、現在は週三回発行、タブロイド版で最近では二〇ページ、すべて郵送で、主に仏教（と神道）を中心とする宗教関係者に広く読まれる。私は六年ほど前から、しばしばその「社説」を依頼されて書いている。「社説」はもとより無署名であるから、私を含めて執筆者の名は知られない。（ただし一九八〇年一〇月から一九八三年八月までのその拙文に他のエッセイを加えて、『仏教モノローグ』という拙著を青士社より公刊した）。ごく最近（一九八六年一月二四日付）、「単一・同質を超える」と題してその「社説」に記した拙文を、以下にそのまま移す。

〈単一・同質が民族・社会・文化について世に騒がれている。

一億一心を叫んだ戦争に敗れたあと、日本のいたるところでさかんに論ぜられたテーマは、近代化(modernization)ということであり、それは一九六四年の東京オリンピックのころまで、ないし七〇年代初めまで続いた。しかしこのテーマそのものは、とうに二十世紀初頭より論議されており、それに付随しつつ、先進(Developed)国と後進(underdeveloped)国という二分があり、後進国はこの近代化によってこそ先進国に参加できると考えられた。（最近では、後進国の代わりに、発展途上(Developing)国と呼ぶが、その地における事情

は、ほとんど変わってはいない。

その際、日本を含み、中国やインドという大国を中心とするアジア地域に、なぜ近代化が芽生えず、もしくは近代化が遅れたかが繰り返し問題とされ、さまざまの原因が数えられたなかで、欧米の先進国と比較して、その最大の要因は、アジアの各地域は、それぞれ単一の文化が根幹をなして、他の文化の侵入や浸透を極力抑制し、各々が同質性の維持に固執して、異民族との混血はもろろん、諸文化の交流・混交が著しく欠如していたことが指摘された。

ヨーロッパにおいても、古代はギリシアからローマ初期までのヘレニズムが、まったく異質のヘブライズムに起原を発するキリスト教を受容することによって中世に移行し、その中世の千数百年の歴史も十字軍や大航海時代を経て、異民族・異文化に接して近代は触発され、ルネサンスという古代復興が前面に押し出された。しかも、ヨーロッパの全地域に散った諸民族・諸文化は、たがいに濃く混じりあって、近代化は進展した。

近代化からは離れて、文化の興隆といった面では、仏教においても、同類の説明がなされ得る。ヴェーダから古ウベニシャッドの時代を迎え、アーリア人がガンジス河流域のインド大平原に進出して、原住民と混血し、異文化に親しく接触して、自由思想家の輩出したなかから、釈尊が登場する。その数百年後に、マウリヤ王朝崩壊以後、交互に北インドに侵入してきた西方や北方の諸異民族の支配が続ぎ、一方では、暴圧されたインド民衆の悲願が燃えあがり、他方、異質の諸文化との混交によって、革新的な機運の醸成された過程に、大乘仏教は誕生した。その大乘仏教も、中期以降に、ヒンドゥー文

化と深くなじんで、密教が栄える。

例証は際限もないほどまでに、新たな文化の創造はもとより、文化そのものの活性化には、異質の文化との親密で複雑な混じり合いが、どうしても不可欠であつて、もしも単一であり同質を保つならば、民族も文化もやがて衰退し、ついには消滅するという途を辿る。このことは、世界の文化史のいたるところに見られる。

確かに、単一・同質の場合には、ごく短期間だけに限つてみれば、猛威を振るうと形容されるほどにすばらしいパワーを發揮し得よう。また純粹という特性や結晶にも近い美質も誇り得よう。しかしながら、それは必ず活力を失い、生氣も消える。長期的には、やがては内実は滅び、醜い形骸だけが残る。

仏教もいまや決して単一ではすまされず、現にそうではなくなつてゐる。日本の仏教を眺めても多くの宗派があり、かつてはそのなかでみずから属する一宗のみを是として足りていた。しかし現在は、諸宗派の連携、あるいは競合が各所ですこぶるさかんであるばかりか、多くの宗派は欧米にも進出する。いわゆる新宗教も、その傾向が強い。また日本と韓国、中国、あるいは台湾など、大乘仏教圏内部の交流と切磋琢磨は深まり、さらには南方のテラヴァーダ仏教との関係も、華やかではないが、着実に強化されている。またキリスト教を初めとして、他宗教との交流もある。それらが、たんなる友好親善や競合だけに終わらず、仏教そのもの、或る特定の宗派そのものにおいて、単一や同質において不可避の独善性を根底から揺るがせ、それらを超えて、自己革新を計り、たえず創造的なエネルギーの拡充に向かうことが、いよいよ望まれている。)

拒るまでもなく、「社説」のスペースは限定されているので文、

中に省略や飛躍がある。しかしこのなかに、比較思想の趣意のこめられてゐることは、心ある方には一目瞭然と思う。「中外日報」という宗教新聞の性格を考慮して、仏教に関連しつつ論じたけれども、この個所は、そのまま他のさまざまな領域に置き換えられる。すなわち、他の宗教でも、哲学でも、倫理学でも、あるいはそのほかのすべての学問の分野に、もしくはさらに広く、人間の営み全般に拡大して、それらのなかのどの一つを取りあげても、拙文の意図するところが通じて欲しいと希う。

4

更めていうまでもなく、自己は自己の外へは出られない。自己に
とつては、自己がすべてである。しかしながら、その自己を自己
が豊かにすることは可能であり、それによつてはじめて、自己は独
善を免れる。その際、本質的な面から眺めるかぎり有限であり相対
的である自己は、自己中心や自己主張によつては、決して自己を豊
かにはなし得ない。周知のとおり、「へいま・ここ」は、明らかに唯
一であり、絶対であろう。しかしこの唯一・絶対は、刹那に消え、
たえず風化されて、雑多・相対に落ちる。だが、それでもなお、そ
の痕跡は残像（仏教のいう「業」）としてとどまる。

こうして、一と多、絶対と相対、もしくは無限と有限という、二律
背反的な、自己矛盾も甚しいそのまっただなかに、自己はあり、自己
は生きる。あるいは強弁のように響くかもしれないけれども、比較
思想はつねにそのような自己とともにあつて、自己ととも生きる。

(一九八六年一月二八日)(さいぐさ・みつよし 筑波大学教授)